

であろう、と。一九一九年、ヒトラーは、ナチ党の前身であるドイツ労働者党に入党、ビヤホールを舞台にして民衆を煽動する威勢のいい党アジテーターになった。しかし当時党内でユダヤ人問題の微妙な諸要素にも通じていた有力なイデオログはバルト出身難民のアルフレート・ローゼンベルクであった。彼は、まだ故郷のエストニアにいた時代にその思想を発展させていた。一九一九年には著書『転形期にみられるユダヤ人の痕跡』の中ですでにシオニズムの問題をローゼンベルクなりに解き明かしている。それによれば、シオニストが創りたがっているのは国際的なユダヤ人の陰謀を始動させるアジトにすぎない。その人種の本性からしてもユダヤ人には自らの国家を形成しうる基本的能力が欠けている、というのがローゼンベルクのドグマであった。しかし彼は同時に、シオニズム・イデオロギーが、ドイツ・ユダヤ人から権利を剝奪する正当化理論として驚異的に役立ち、おそらくは将来、ユダヤ人の出国促進のためにシオニズム運動を利用しうる可能性が存在するとも感じていた。ヒトラーはやがて談話においてもこの問題に触れるようになり、一九二〇年七月六日、パレスティナがユダヤ人にとって適切な地であること、その地においてのみユダヤ人は自らの権利の取得をのぞみうると宣言している。一九二〇年以後、ナチ党機関紙『フェルキシャー・ペーパー・バスター』にはパレスティナへの出国を支持する論説が出はじめ、一九二六年四月二〇日バイエルン州議会でのユリウス・シュトライヒャーの演説にも示されたように、党の反ユダヤ主義宣伝家も定期的に繰り返しこの点に立ち返っている。しかしヒトラーにとって、シオニズムの価値は、ただ、ユダヤ人がけつしてドイツ人にはなりえないことを確認する点のみにあつたといつてよい。

〔シオニストは自分が堂々と異民族であることを公言する〕、というのも、シオニズムが、他の世界の人びとに、パレスティナ国家創設によつてユダヤ人の民族至上の自己意識は満たされるのだと信じ込ませようとすることによつて、ユダヤ人は、愚鈍な非ユダヤ人をこの上なくするがしこい方法でまたまただますからである。パレスティナのどこかに住むためにユダヤ人国家を建設する、とは彼らは全然考えていない。ただ自らの主権がそなわり、他の国家の介入が封じられた、国際的な世界詐欺センター組織、すなわち犯罪が確定されたルンペン(1)の隠れ家、詐欺師候補生の大学を望んでいるにすぎない。

ユダヤ人は自らの国家を建設するのに不可欠な人種的本性を欠いている。ユダヤ人は自然な理想主義に欠け、本質的に吸血虫であつて、労働を嫌悪している、とし、ヒトラーはさらに以下のような解説をおこなっている。

けだし、ある特定の領域空間をもつて国家を形成することは、国家民族の理想主義的信条、それも特に労働概念の、正しい理解を前提にしているからである。まさにこの態度が欠けていけば、領域空間だけの国家はどんなに創設の努力をしても、否、どんなに維持の努力をしてみても、失敗する(2)。

最終目標としてユダヤ人出国を想定した場合の、シオニズムの利用可能性についてはやくからどんなに思いをめぐらしていたとしても、ナチスはドイツのシオニストと関係をもつ努力はしていなかった。逆に一九二五年にウィーンでシオニスト会議が開かれた時、その妨害のために騒いだ連中の一集団だったのである(3)。